

開成まちづくり協議会 生活・環境部会では、  
環境美化活動の一環として、  
開成公民館建屋周辺の除草活動を行いました！

『樹も草も しずかにて梅雨 はじまりぬ』 日野草城（現代語訳：木や草も静かな梅雨の始まりだ）しとすと静かに梅雨が始まった様子を詠んだもので、平年どおりの梅雨でありますように！

さて、開成公民館の建屋周辺には雑草が繁茂していましたが、6月2日(金)、3日(土)、9日(金)と参加者は異なりますが、これらの除草活動が本年度最初の生活・環境部会の取り組みになります。

まず、草刈り機で伸びた雑草をあらかじめ刈り取った後、残った雑草を丁寧に除去していきました。5月27日(土)に実施された自主サークルの皆様による除草活動と相まって、きれいな環境になりました。参加された皆さん、本当にお疲れさまでした。



公民館建屋南側



除草後



公民館北側



除草後



公民館北側



除草後

ところで、「雑草」で思い出したことがあります。4月からNHKの朝ドラ『らんまん』が放映されていますが、ご案内のとおりこのモデルは「日本植物学の父」と言われる牧野富太郎博士。牧野博士は、「雑草という草はない」という名言を残されています。

牧野博士の出身地である高知県には、その業績を顕彰するために造られた県立牧野植物園があります。本年3月に四国各地を巡るツアーに参加しましたが、牧野植物園も観光コースにあり、様々な展示物で在りし日の博士の躍動を感じることができました。(以下の写真は、文章を除き、「るるぶweb「牧野植物園」フォトジェニックなスポット紹介」より転載したものです。)



高知県立牧野植物園の一角。ガラス張りの温室が見えます



👉 こんこん山広場(山の起伏を利用し植物を植栽)



温室の内部(ランの花盛り) 👉



昭和33年に高知市五台山に開園。約8haの園内には博士ゆかりの植物など四季折々の3000種類以上の植物が楽しめます。温室の見事なランの花々に圧倒されました。

さて、牧野博士の名言「雑草という草はない」には、実は続きがあります。その知られざるエピソードを紹介します。山本周五郎が作家として売れる前のこと、大正15年から昭和3年にかけて帝国興信所(現在の帝国データバンク)を母体とする雑誌「日本魂」(にっぽんこん)の編集記者を務めていたころ、牧野博士に20歳だった山本が「雑草」という言葉を口にしたところ、牧野博士がなじむような口調で次のようにたしなめたそうです。

「きみ、世の中に“雑草”という草はない。どんな草にだってちゃんと名前がついている。私は雑木林という言葉は嫌いだ。松、杉、檜(なら)、楓(かえで)、樺(くぬぎ)一みんなそれぞれ固有名詞がついている。それを世の中

の人々が“雑草”だの“雑木林”だのと無神経な呼び方をする。もし君が、“雑兵”と呼ばれたら、いい気がするか。人間にはそれぞれ固有の姓名がちゃんとあるはず。人を呼ぶ場合は、正しくフルネームできちんと呼んであげるのが礼儀というものじゃないかね」

(木村久邇典『周五郎に生き方を学ぶ』実業之日本社より)

この名言は、取材のため訪問した山本周五郎をたしなめた言葉だったのです。山本はこの言葉が胸に刻まれたようで、「これにはおれも、一発ガクンとやられたような気がしたものだ。まったく博士の云われるとおりでと思うな」と振り返っています。

この牧野博士の名言は長く出典となる資料が見つからない状態が続いており、博士が本当に言ったのか不明のままでした。しかし、令和4年8月、牧野記念庭園記念館(東京都練馬区)の田中純子学芸員らの調査の結果、ついに出典が見つかったと高知新聞が報じたとのことで、時代小説で知られる作家の山本周五郎が戦前、牧野博士を取材した際にこの言葉を聞いたと話していたとのこと。

注、以上のエピソードは、「知ってる？牧野富太郎の名言「雑草という草はない」には続きがあった。朝ドラ『らんまん』のモデル」、の安藤健二氏の記述を基にしています。

生活・環境部会では、今回の除草活動を手始めに、取り組みの趣旨に賛同する部会員が生活の区域を中心に、通年事業として道路や公園などでゴミ拾いや除草活動を行うことにしています。それぞれの都合のつく時間に、時間の長短を問わず、できることから実践していきます。

継続は力なり、個々の取り組みが波及効果となって地域の環境美化につながっていきますように！



開成公民館の玄関前にて、環境美化活動(令和5年6月9日)に参加された生活・環境部会の皆さん。活動後のすがすがしい笑顔に癒されます！